

淀川水系流域委員会 第 21 回淀川部会（2003.7.5 開催） 結果概要

03.8.1 庶務作成

開催日時：2003 年 7 月 5 日（土） 13：30～16：55

場 所：京都リサーチパーク 地階 バズホール

参加者数：委員 15 名（1 名は部会長の要請により参加）、河川管理者 18 名、一般傍聴者 67 名

1 決定事項

- ・淀川部会の現地視察（木津川筋の魚道を中心とした視察）を 7 月 28 日に実施する。

2 審議の概要

委員会およびテーマ別部会の状況報告

資料 1「委員会および各部会（提言とりまとめ以降）」、資料 3「7 月～9 月の委員会、部会、運営会議の日程について」をもとに、これまでの開催状況、地域別部会の役割、意見書作成までの流れについて説明が行われた。

説明資料(第 2 稿)の検討について

資料 2-1「淀川部会検討会（2003.6.26 開催）の内容報告」をもとに前回の検討会（6/26）で議論された内容「水源保全のための森林」「流砂の遮断」「魚道」「堤防強化」について意見交換が行われた。また、「琵琶湖の浸水被害の軽減と天ヶ瀬ダム、瀬田川・宇治川改修、大戸川ダムの関係」についても意見交換が行われた。主な意見や河川管理者への依頼事項は、「3 主な意見」の通り。

一般傍聴者からの意見聴取

一般傍聴者 4 名から発言があった。主な意見は、「3 主な意見」の通り。

3 主な意見

説明資料(第 2 稿)の検討について

資料 2-1「淀川部会検討会（2003.6.26 開催）の内容報告」をもとに前回の検討会（6/26）で議論された内容「水源保全のための森林」「流砂の遮断」「魚道」「堤防強化」について意見交換が行われた。また、「琵琶湖の浸水被害の軽減と天ヶ瀬ダム、瀬田川・宇治川改修、大戸川ダムの関係」についても意見交換が行われた。

水源保全のための森林

- ・水源保全のための森林の維持管理については、当然、認識している。しかし、河川管理者だけではできないことなので、説明資料では「関係機関との連携を図る」という記述になっている。（河川管理者）

データやメカニズムははっきりしていないかもしれないが、流域全体で見た森林の貯水・保水機能は軽視すべきではない。森林の保全について記述すべきではないか。生態系も含めて山から海までの連続性を修復しなければならないという点は、河川

管理者にとって共通認識となっているが、森林の保水機能や貯留機能については、いまだに結論が出ていないため、現段階では、洪水対策としての森林の保水機能について明示することはできない。ただし、第 2 稿の 39 頁の「流域で水を貯める」では、森林も含めた自然地の保水機能の保全を挙げている。また、土砂流出については、森林の有無によって大きな違いがあるため、土砂の項では、森林の保全整備について「関係機関と連携を深めていく」と記述している。(河川管理者)

琵琶湖の水位・浸水被害の軽減と天ヶ瀬ダム、瀬田川・宇治川改修、大戸川ダムの関係

- ・ 瀬田川～宇治川塔の島地区の整備によって、1500m³/s まで流下能力を増加する計画があるが、この計画と琵琶湖の水位と内水被害の関係が不明確だ。1500m³/s 流下させることによって、琵琶湖の水位を素早く低下させ、琵琶湖周辺の内水被害が軽減できるというのが河川管理者の説明だが、1500m³/s とする意義があるのか、きめ細かい、説得力のある説明をお願いしたい。

4 月の委員会にて、昭和 36 年洪水を例にして、現在の河道・堤防、地域の状況で、琵琶湖の周辺でどのような被害が発生するのかを説明した。今後、琵琶湖の周囲の地形(どの程度の高さにどの程度の土地が広がっているのか)、どういった家屋が存在しているのかについて、改めて資料を提出したい。(河川管理者)

- ・ 他の狭窄部は開削しないとしているにも関わらず、鹿跳溪谷(狭窄部)は開削(バイパスゲートで抜く)すると説明されている。これはダブルスタンダードではないのか。

瀬田川では、洗堰で流量がコントロールできるので、鹿跳溪谷を開削しても下流には負担を与えない。「下流に負担を与えない」という根本的な考え方は同一だ。

(河川管理者)

- ・ 琵琶湖の水位にもっとも影響を与えるのは洗堰の操作。大戸川ダム、丹生ダムが琵琶湖の水位低下を抑制する効果はあまりにも低いのではないか。

現計画においては、大戸川ダムが琵琶湖の水位に貢献できる量は 10cm を越えないことは間違いないだろう。しかし、たとえ数 cm であってもコイ科の魚類が水位の浅いところで産卵をしているため、その産卵行動に大きな影響を与えると考えている。より効果を発揮できるよう、5/10 の委員会で説明したように丹生ダムと連携を図ろうと考えている。(河川管理者)

丹生ダムと連携しても、琵琶湖の水位に与える影響は微々たるものではないか。琵琶湖の水位に与える影響は洗堰が圧倒的に大きいため、魚の産卵の時期にある水位を保つということは、ダムではなく、洗堰による操作でしかできないのでは。説明資料では、この点について、数値を用いてきちんと説明されていない。数値やデータを用いた説得力のある説明が必要だ。琵琶湖の水位を 1 日 1cm 上げるためには 78m³/s の水を与える必要がある。丹生ダムから補給できる水の量は 10m³/s 程度ではないか。

現計画では、丹生ダムからの放流量は 50m³/s を予定している。ただし、ダム下流の姉川や高時川に与える影響については調査不足であり、今後調査、検討しなければならない課題だと認識している。今後、数値も含めてきちんと説明させて頂きたい。(河川管理者)

- ・整備の優先度についてお聞きしたい。天ヶ瀬ダム再開発計画では、瀬田川の河道掘削、鹿跳溪谷の開削、天ヶ瀬ダムの放流能力増強、塔の島地区の河道掘削の4つの施策によって、1500m³/sを確保するということだが、これらの整備に優先度はあるのか。

瀬田川の河道掘削と鹿跳溪谷の開削を実施しなければ、必ずしも下流に1500m³/s流れないというわけではなく、琵琶湖の水位が高くなれば(ただし、この場合、琵琶湖周辺では浸水被害が発生している)、現状でも1500m³/sを流すことはできる。しかし、琵琶湖沿岸の浸水被害を軽減するためにより低い水位で1500m³/s流す必要があり、どれが欠けても不十分である。具体的な施工の順序は考えていきたいと考えているが、少なくともそれぞれの事業が完了する時期を合わせたいと思っている。ただし、1500m³/sを流したとしても琵琶湖沿岸の浸水被害を完全に解消できるわけではない。(河川管理者)

砂防堰堤と流砂の遮断

- ・ダムによる流砂の遮断は非常に大きな問題だと認識しており、対策が必要だと思っている。今できることとしては、ダムに貯まった砂をダンプで運ぶというものだが、下流のどこに、どれくらい、どの時期に移動するか等、考えなければならないことは多くある。検討していかなければならないと思っている。(河川管理者)

明治以来、日本の河川では、土砂災害を防ぐために砂防ダムをつくってきたが、ダムで完全に砂を堰き止めてしまった。現在はまだ川岸に砂が残っているので、まだよいが、今後、状況はますます悪くなっていくだろう。砂の量だけではなく、砂の流れが確保できるような川づくりをしていかなければならない。

- ・内水面漁業の漁獲量が25年前に比べて半減した理由の1つは、流砂が遮断されたことにある。特に、水生生物にとって、水に混じっている細かな砂の流れが重要であり、これが途切れると、生物だけではなく、川の形状や海への悪影響も現れてくる。
- ・説明資料には、ダムに貯まっている砂をダンプで下流に運ぶ方法が記述されているが、過去に淀川流域で実施された例はあるのか。

近畿ではないが、矢作川、矢作ダム、天竜川で実験的に数年前から実施されている。他の方法では、出し平ダムと宇奈月ダムでは排砂ゲートによる排砂を、関西電力の朝日ダムでは土砂バイパスによる排砂が実施されている。いずれの方法も様々な問題があり、これがベストと言える方法はまだないのが現状だ。ダンプによる土砂運搬は、いくつかの検討が必要だが、今すぐにでもやろうと思えばできそうということで記述した。いずれにせよ、他の方法も含めて、どういう効果があり、どの程度コストがかかるのかも含めて検討していきたい。(河川管理者)

- ・淀川水系でダンプやゲート等による排砂を実施できる可能性のあるダムはあるのか。

既設ダムで砂を下流へ流すためには、貯まっている砂の成分や粒径等を考えた上で判断していかなければならないので、説明資料(第2稿)では、既設のいくつかのダムについて検討していきたいと記述している。(河川管理者)

可能性という意味では、天ヶ瀬ダムでは、放流能力の増強と併せて土砂移動も検討している。旧志津川発電所の水路を改良すれば、土砂をうまく下流に流すことができるのではないかと考えている。(河川管理者)

魚道

- ・予算と時間が限られている以上、魚道整備は優先順位をつけて行っていくべきだ。

淀川本川では、現在のところ優先順位を決定した計画はないが、早急に検討していきたいと思っている。中でも特に、淀川大堰の魚道については、淀川の最下流にあり、しかも、かなり昔につくられたもので、部分的な改良では限界がある。このため、本格的な見直しをやるべきだと考えているので、優先度は高いものにだろうと思っている。（河川管理者）

- ・魚道は、水生昆虫等の水生生物の上下移動も考慮して整備するべきだ。アユさえ上がれば良い魚道ではなくて、他の水生生物も上げられる魚道が必要。
- ・これまでの魚道は、ダムさえ上がればよいという考え方で、ダム湖の上流への遡上を視野に入れてつくられていないように思う。特にサケ科の魚は、ダムより奥の源流に近い場所で産卵をするため、ダム湖上流への誘導等についても考えるべきだ。
- ・木津川の魚道は形だけで機能していない。他の場所の魚道にしても、鳥のえさ場になってしまっているところもある。河川管理者も漁業者も魚道についてはわからないことが多い。今後、きちんと機能する魚道を考えていかなければならない。
- ・渇水時でも魚が遡上しやすいように、斜め井堰を検討してほしい。

斜めの構造物は、洪水時に水が集中して弱くなってしまうために避けた方がよいというのが、治水上の大原則ではあるが、個別に工夫のしようはあるかもしれない。

（河川管理者）

河川工学上好ましくないということは分かっていたが、あえて聞いた。ちゃんと魚が上れる魚道ができれば、そういった資源を子どもの世代に受け継いでいけることができる。コストがかかったとしても、今後のことを考えて、魚が集中して遡上できる魚道がある堰をつくれぬのか。

確かに堰自体を斜めにすると、洪水時に流れが偏ってしまい、治水上、問題がでてしまう。しかし、例えば天野川の落差工は、下流に向かって斜めの勾配を付けているので、どんな水位であっても魚が遡上できるようになっている。治水上の支障と魚道の上りやすさを考えて、一律に全部がどう、とはいかないが、まだまだ工夫の余地はあると考えている。（河川管理者）

流量が多くなって越流水深が大きくなれば、堰が少々斜めであっても、水の流れには影響がないという説もあるので、斜め井堰をタブー視せずに、場所に応じて検討して頂きたい。

堤防強化

- ・現在、個々の箇所の堤防強化技術については別途委員会を設立して検討を行っている。検討の経過については流域委員会に示したい。（河川管理者）

<河川管理者への依頼事項>

- ・琵琶湖の水位・浸水被害と天ヶ瀬ダム、瀬田川・宇治川改修、大戸川ダムの関係についての定量的なデータによる説明

- ・塔の島地区の40年前と現在の航空写真の提供
- ・大戸川ダム事業と県道事業と関係に関する資料の提供
- ・琵琶湖の水位と周辺の内水被害の関係と1500m³/s放流の関係に関する説明
- ・水需要の精査・確認、新規需要計画、ダム等の水源施設の財産権と債権、利水事業者の財政事情の精査・確認に関する表の作成（資料2-2 P30～33）
- ・ダムの計画変更のプロセス（昔の計画との対比）

一般傍聴者からの意見聴取：一般傍聴者4名から発言があった。

- ・説明資料(第2稿)に舟運の航路確保が記載されることになったのは何故か、河川管理者に説明して欲しい。
- ・流域の住民が安心して暮らせるよう、大戸川ダムを建設してほしい。また、ダム建設を契機に田上山の再生を目指して市民が一体となって進めている取り組みも計画に入れてほしい。
- ・琵琶湖の環境改善のためには、洗堰の操作規則の変更が必要。塔の島地区で1500m³/s流量が確保できれば、規則の変更も可能ではないか。
- ・天ヶ瀬ダム再開の工事用道路整備はトンネル式放流設備建設のためなのか。直ちに中止して頂きたい。

以上

議事内容の詳細については、「議事録」をご覧ください。最新の結果概要および議事録はホームページに掲載しております。